



今、振っている試験管から得られる結果が...

川崎医科大学 衛生学 大槻剛巳



大震災をはじめ、秋口の台風などによる水害等、自然の猛威とそれに曝さ今、振っている試験管から得られる結果が...れることによる科学技術の脆さがつまびらかになってしまった2011年が、それでも時間は確実にすべての人たちの上を流れていくことを改めて感じさせるように閉じていき、2012年が始まりました。

岡山県倉敷市にあります川崎医科大学(創設者の姓による命名です)の衛生学におります大槻剛巳(おおつきたけみ)と申します。私は本学を卒業した後、10余年血液内科学を専攻しておりましたが、1996年より現在の衛生学に所属し、主な研究領域は「珪酸やアスベストの免疫影響」です。衛生学という領域は環境からの健康障害について実験的に検証し、さらにその成果を臨床現場や社会の中に活かすことが目的ですので、教室の研究テーマ以外にも種々勉強しなければなりません。丁度、私がこの領域に入った頃にはシックハウス症候群や化学物質過敏症が話題として大きく取り上げられていた時期で、その勉強にと日本臨床環境医学会に参加したりしておりました。

その流れで2009年には第18回の学術集会を主催することになり、岡山市で開催いたしました。この学会では大学等の研究者による科学研究の発表が中心ですが、環境と健康の問題を捉えるに際して、科学という評価基準や、今の医学医療領域で云う処のEvidence Based Medicine (EBM) (「根拠に基づいた医療」と訳されます)として不備であっても、基本的に健康の不都合を抱えられた(あるいは被られた)人たちの声が原点であると考えて、「事例セッション」を設けました。一般演題のセッションの中に入ってしまうと、発表後の質疑応答などでも、科学領域の人たちが自分たちの基準だけで批判的な問いかけをしたりして、普通の人たちが何らかの原因で健康についてこんなに困っているのだ、という真摯な訴えを自分たちの領域の中だけの基準だけで収めてしまおうとしているような感触を常々抱いていたからです。

その時に、電磁波過敏症に関連して託麻の環境を守る会の宮寄さんや、札幌のVOC-電磁波対策研

究会の加藤さん、またシックハウスに関連してNPO 団体「VOICE. Labo」の小山さんや、しがシックハウス対策研究会の辻さんにご発表いただきました。会場に集まられた研究職の人たちにも概ね好評を頂戴し、また臨床の現場から研究の領域に入ってきていた自らの中でも、そこに何らかの症状を訴えていらっしゃる人たちがいるという事実により、自分たちも正面から対峙しなければならないという重要性を再認識させていただきました。

研究の対象ということから、2005年のクボタショック(兵庫県尼崎市の旧クボタ神崎工場周辺の住民の方々から、本邦ではアスベストでしか生じない悪性中皮腫という、診断・治療なども一筋縄では解決できない予後の芳しくない疾患が多く生じていることが明らかとなったこと)によって社会的にも大きく取り上げられてきているアスベスト問題について、患者さんやそのご家族(あるいはご遺族)、そしてその支援をされている方々とも触れ合う機会が多くあります。勿論、臨床の現場で働いているのではないので私たちの研究成果や知識で支援することしか出来ておりませんが、特に私たちの教室で一緒に珪酸やアスベストの免疫影響について研究を進めてくれている教室員の皆は、実験系ということでその出自は理学部や農学部など医学医療系とは異なる出身者が多いことも事実であり、その中で、常々私は「医科学の領域、それも衛生学という領域で働いてくれているのも何かの縁であり、その時に『今、振っている試験管の結果が、今PCRという手法で増幅している遺伝子の発現解析の結果が、3年、5年あるいは10年先のアスベストによって健康障害を被られた人たちに対して福音となる』ことを祈って、そして信じて研究を進めよう」と云っております。

2012年は日本全体が新たに生まれ変わる節目の年になるのかも知れませんが、私たちが科学やEMBを不要なまでに拡大解釈することなく、真摯に健康障害の原点を忘れないようにしながら、医科学研究を進めていきたいと思っております。何かありましたらお気軽に takemi@med.kawasaki-m.ac.jp までご連絡下さい。